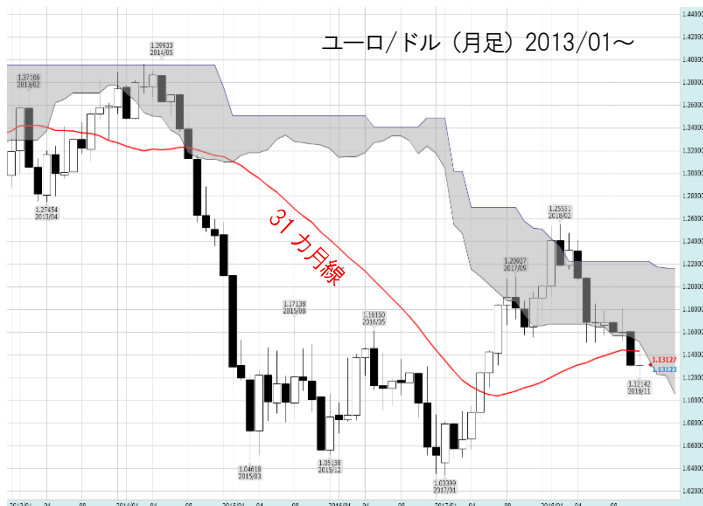


■ やや高まってきた!?ユーロ/ドルの下値リスク

足下では、まずユーロ/ドルがテクニカルに下放れる動きとなってきた点に大いに注目しておきたい。今週12日に長めの陰線を描きながら直前(10/31)安値=1.1302ドルを下抜けたユーロ/ドルは、そのまま8/15安値=1.1301ドルをも下抜けて一層弱気になびきやすい展開となってきた。

周知のとおり、その要因として注目されるのは「英国のEU離脱協定案の最終合意に辿り着くまでの道のりが決して平たんではないこと」と、「イタリアが再度提出した(11/13)予算修正案が欧州委員会に受け入れ拒否される可能性が高いこと」である。

英国のEU離脱協定案については、このたび閣議での承認は得られたものの、年末から年明けに予定される英国議会とEU議会での承認が得られるかどうかは不透明とされており、実際、英国議会内においては強い反発も予想される。また、イタリアの予算修正案については、欧州委員会が受け入れを拒否したうえで数十億ユーロの制裁金を課すプロセスの検討に入る可能性が高まってきていることが嫌気される。



左図にも見るとおり、ユーロ/ドルの月足ロウソクは10月に終値で一目均衡表の月足「雲」下限を明確に下抜けており、さらには31カ月移動平均線(31カ月線)をも下抜けてきている。

結果、弱くムードが一層高まりやすい状況となっており、ここは一応当面の下値の目安についてもある程度のあたりをつけておきたいところと考える。まず、直近(11/12)安値=1.1214ドルというのは、2017年1月安値から今年

2月高値までの上昇に対する61.8%押しの水準である1.1200ドル処にほぼ達したという見方になろう。一つの節目に到達したこともあり、目先は一旦反発しているが、仮に同水準をも下抜ける展開となった場合は、次に1.1000ドルの心理的節目、さらには76.4%押し=1.0863ドルあたりというのが順に下値の目安になってくるものと思われる。

主に前述した要因でポンド安&ユーロ安が演出されているなか、結果的に「ドル1強」の様相はさらに色濃くなっており、おかげでドル/円も基本的には底堅さが感じられる展開となっている。とはいえ、株価睨みという要素が多分に関わっていることも否定はできず、その点では足下の米アップル株急落に伴う米・日株安の影響というのも無視できないところではある。

むろん、アップル株の急落というのは文字通り「ショック」ではあるものの、それが故に「一時的なもの」という見方もできると考える。個人的には、アップル固有のビジネス・モデル展開にもそろそろ先が見えて来たと考えており、仮にそうであったとして、そのことがいつまでも相場全体の足を引っ張り続けるとは思えない。

もともと、米IT・ハイテク関連銘柄の割高さが際立っていたことは事実であり、当然のことながら一定の調整はやむを得ないものと考えられる。とはいえ、それによって日本株の割安度がさらに増す結果になるというのは理不尽に過ぎる。つまり、今後は米IT・ハイテク株は割高の調整が適切に進み、同時に日本株に見られる割安度の修正も健全に進むということになっていい。

米・日株市場において、いずれ足下のボラタイルな状態が収束し、適切かつ健全な値動きが取り戻される状況となれば、全体のムードも改善し、結果的にドル/円の上値にも一定の上昇余地が改めて拓がってくるものと考えられる。

(11月15日 10:30)